

「いびば」を拝見して

佐々木 秀也

久しぶりに詩教材の御教壇に探し、めぐら同様の私も、ひとすじの光明を得たようだ。最も苦手としている「詩の扱い」について、私なりに前述に對して明かるいものを感することができた。これは、何ものにも代がたい大きな収穫であった。

今迄に、幾度も詩の御教壇を拜見し、そのたびに感激し、深い感銘を受けてきた。また自分で、日常の教壇で詩を扱ってきた者である。しかし、よく反省してみると、年数をかけた割合として大きな進歩のなからだことが痛感される。それは何故だろうか。解説は明確である。日常の教壇に打ちこむ態度に底なしがない。従つてまた御の御教壇を覗む視線も定まらず、ただ漠然とながめていたためである。

日常の教壇に面白くないければ、そこに必ず問題が出てくる。自分で解決しようとして、いろいろと考えてやつてみる。しかし、自分ででは解決できないことが多い。こうして悩む苦しむ過程を経れば、師の御教壇がよく見えるようになると思う。ちらり師の御教壇を覗んだあとで、それをよく分析し、総合してみるとことによって、そこに一直して流れているの、いわば法則性のようなものを発見することができる。これによりて、今まで悩み苦んだものが、一そうされるというものではないかと思う。この過程を繰返しながら、螺旋的に向上していくのが、眞の姿であると言える。

ところが、日常実感に嵌つるのがなければ、そこは問題も悩みも湧いてこない。従つて、師の御教壇も忽然とながめてしまつことになり、法則を看取するに至らないことになる。その結果、師が教つて教せて下さった教材そのものは何とかやれるようになるが、それに似た教材であつても、異なる教材になれば、どう扱つたらよいのか見当がつかないということになつてしまつ。これがこれまでの私の姿であった。ここで私のさんけを記すことをゆるしてほし。

平成6年小学校での冬の会に、私は五年生の詩教材二時間の登壇を恵まれた。その教材は忘れられない。「いなかけ」と「火口」の二つであった。特に詩教材が苦手な私は、今まで「度々」「これぞ」と思う歌をふんだんに詠じたが、全く自信喪失症にかかるつていた。そうした時に詩をあてられたのだから閉口した。しかし、これが修行なのだと自分自身に言い聞かせ、何とかして克服した。歌の「せめて」「可むな」くらいの肝を預けるところまでは前進しようとした。そして真剣に教材と取組み、いろいろ歌を練つてみた。しかし、「下手な考え方にはなり」とは、私のためにできた苦難かと思う程の大きさなのだ。さんざん苦んだ末、やつ

JUNがならむと想う事ができた。自信喪失感も回復のささしを見せたと感心した。

かくして明鏡登壇した次第であったが、その結果は、まことに見てもわれな輩となり、ただ油汗がじみでるのみであった。途中で泣きにくくなる想いであり、途方もなく長く感じられた四十分であった。やつとの想いで涙をおり、師に御座禪しようとして見たら、何とお休みになつておられるではないか。さえない處には自然お休みにならのが通例で、医療の出来

不出来は、この事で判定してよいと言える。お休みになつておられるのなら、そこは御存じないだろと思うのは当然だが、さはあるず、直下にくだされる事柄は、実に厳しいものであり、その寸評は、あたかも名医の振るうススの如く、寸分の狂いのないものだから更に驚く。

11時間とも、私の妻の評はここに記すまでもなく、酷評に近いものであった。これはすでに覺悟していたことである。なぜなら、地をおりる時に、自分で自分の邊のよしあしの判断はできているからである。ただ肝心の不出来の原因がわからないことが多い。その時師から、その原因についてほんの一言いつていただけのことによつて、もやもやしていたものが、目が覚めるようを感じて「そうである」と思われる。

平良崎小での三時間の教説は、終生忘れ難ぬ教説となるであろうが、それは偶然の出来事でなく、それまでの私の歩みの縮圖であることを肝に銘じなければならぬ。そして三度とそのてつをあまないようにしてないと考え、あえてここにざんげの記述述べたわけである。

師の御教説「とひばこ」を耳見し、そこから、私なりに把釋した、新し

い法則のよしなりの、について述べてみたい。

教材「とひばこ」は、極めて單純で、何の変哲もない生活経であり、散文である。しかし、そこには子どもの純な氣持と眠りない力が表現されている、とひばこをと以前の不安な気持、「とべなくとも、がんばるんだ。」という決意、力いっぱいふみきり枕をけつたら、思いの外とんでいた、「わたしはとべたんだ。」という、自信と羞恥が表現されている。

師の御解説

著録の要点を概観してみると、師の意図を構想をうかがうことができる、頗る、脚は、三心六意、すでにこの時の第三講、つまり「とべた寝び」を明瞭かに引き出されている。そして六とくでは、その寝びを文に即して確認され、説明されている、これは極めて重要なことであると思ふ。というのは、師が常に強調している通り、詩は「直譯の運動であり、ひらめきによって生まれたものである」という点である。従つてその詩を読む場合、ひらめきによつて読みぬければならない。といふのがものの道理であろう。

ひとはこういうわけだからこういう気持ちとか、作者がこうすることをしたのはどんな気持ちがあつたのだというように、説明や論證によつて作者の心をとらえるのは、直譯的な把釋ではない。詩を詩として扱うためには、どうやらこの直譯・ひらめきが重要なポイントになるように思う。詩の扱いの難かしさがここにあるといつてよいのではなかろうか。

平良崎小での私の願がさえなかつた原因は、主としてこの点にありたと反省している。あの「いねかけ」を立案するとき考えたことは、如何にし

て「二とく」と「六とく」を重複させないようにならまいか。また、六とくでは如何にして一気に第三回を盛りあげるかということであった。だから、「二とくでは、第三回に足をふみいれないように用心し、作者の立っている位置とか前後の行動とか、まわりの情景を繋げたりして、第一回的部を往復し、それから徐々に「六とく」で作者の心を盛り出せばよいと思つていた。今になって考えてみると、全くはかけたことで、恥かしいことであるが、その時点ではそう信じていた。

詩では第一回が極めて單純であり、平易である。作者の心が單純的にひらめいたものを、短かいことはで簡約的に表現したものであるから当然である。その單純なことをひねくり廻して複雑に扱つものだから、子どもの心が離れていくわけだ。子どもは第一回的語彙・事柄はすでにひとりで把握している。従つて子どもの求めているものは単純ではなくて、詩の心である。それなのに、二とくでは、なるべく詩の心・第三回にはあれまいように努力したのだから、子どもが乗つてこないのは当然である。何の不思議もないことである。こうして子どもの心をほるか彼方に走りやつてかかる六とくで「気に尋りあけよう」と力んでみても、結局私の「ひとりすむつ」に終つたわけである。こんな單純な論理が、どうしてわからなかつたかと腹立たしくなる。こうした時に、「師の御教説」とひはこ」を想起して頂いたのはまことに幸いであった。

さて、これから師の御教説の経緯について述べてみたいと思う。

一 五〇

師は「とびはこ」全文をおしまじまで一人の子どもに読ませ、更にもう一人別の子どもに読ませられた。これには次のような意味があるのでなかろうか。即ち、詩というのは感情の流れであり、そこには音楽のような調子があり、リズムがあると考えられる。それをいくつかに区切つて読ませた場合、その調子やリズムが途絶えて詩の味わいがどうにくくなると思われる。全文を逐一で読ませられたのは、單に文が短いからということだけではなくて、こうした理由からの配慮であると考へられる。「一よむ」など、誰でも簡単にできると安易に考へ、機械的・無反省にやつてはならないのだとうづく感じた。

三 とく

いさなり歌を描かれた。「何に見てぐれるかな」と問われている。これは何でもないことのように思われるかも知れないが、極めてしさに富み、且つ意味深義である。普通は、題目を「とびはこ」と板書して使うところであるが、それを歌に表現されたわけである。題目の扱いは、全文のりんかんを示してやることであるから、題目そのものを歌で表現して何の不都合もないわけである。実は、こんな感想的なことではなくて、因で表現されたことの種類的な意味は、それが視覚的であり、直感的に内容が伝えられるいう点である。あの「とびはこ」の歌を舉いただけで、何の説明も、回答も不要で立派に題目の扱いはできている。これほど簡潔な扱いはないと想う。更に、絵や図は文字よりはるかに現実感があり、臨場感があり、ダイナミックにはたらきかけるという長所がある。どうした頃をさらりと取入れる

師の御工夫に感嘆する。

とびきをやるのに必要なみ切板や、マットがそえられ、壁紙が張れられたところだ。

この時を作った人は、はじめどちら側にいたのか。と問われた。じいがいわゆる「作者の想定」である。私共のそれと大きく異なる点は、「まわり道」をしないところである。必要にして最少限の

問い合わせ、すばりと窓からいられる。ほんとうに「鮮か」の一語にござる。ここぞむごたどする。詩の味わいが消えてしまう。端度がさがる。当然次の問い合わせが出来ていた。

○いつまでもじつち前にいたらうか。

これは前の問い合わせで一对となつてゐる。といふより一つの問い合わせは第三回のほりさけに向かつて進められている。

○左側にいたときと、左側にきたときでは、違うところがあるだろか、

問が違うか。

という問い合わせで、とびきをとぶ前の不安な気持ちと、とんだ後の安心感。書びが第二回と結びあつて鮮明に描き出された。

ここで注目しなければならないのは、問い合わせが非常に少ないという点である。前にも述べたように、時は直観的なものであるから、直感的に読まなければならぬ。その取扱いもまた直観的でなければならない筈である。

二とくの問い合わせが少く、作者の気持ちを端的に引き出すのは、こうした理由に透くものであろう。問い合わせが多くなれば、どうしても詩の雰囲気が薄

らぎ、詩情が湧いてこない。ただ、問い合わせの数が少ない程よいといつて、核架木筋の問い合わせでは、詩の心を充分に出すことが出来ないのだから、「ひらめきのある生徒の」問い合わせが用意されなければならない。こうした観点で師の御教説の筆録を読み返してみると、そのすばらしさに、あらためて驚嘆させられる。

六 とく

語義からはいられ、「不安」を拔いた、この詩を取る上で欠くことのできない重要な語であることは誰の目にも明きらかである。しかも新田四郎からいふ、「不安」を拔いた詩は、誰の目にも明きらかである。しかも新田四郎からいふ、「不安」を抜いた詩は、誰の目にも明きらかである。

つづいて区分に終られた。

○作者の気持ちを考えて二つに分けなさい。

区分の要点を示して考えさせておられることは注目したい。文章の内容や子との力にも圖わることであるが、何を基準に分けはよいか迷うことが多い。その基準や要点を示してやることにより、全部の子どもが同じ方向で考えられるようにしてやることがよいわけである。何でもないようなと、とんだあの文とに区分され、

○前の方はどんな気持ちか。

と問われて、「不安な気持ち」を出さず、ついで

○何が不必要な。

と聞かれた。そこで、「とべるか、とべないか」と、胸をヒキヒキさせて
いる場面を授われ、

○どちらの気持ちが強いの、

と切りこめた。この問いは、まじとほ懇意なでは出せない無いで、さわ
めて格調の高いものである。

この問いに対して子どもは、「とべないと違う気持ちが強い。」と答え
れば、「そうかな。」と言わば、「とべると悪い気持ち」と答えれば、「
そうかな。」と言わば、「とべると悪い気持ち」と答えれば、「

「とべる」と言わる。子どもたちが不必要な顔したのを机会に「
「とべる」という気持ちも強いの、とべないと悪い気持ちも強いの、だから
不必要なやんだよ。」

と、不必要な顔を明きらかにすると共に、とびきりと前の不必要な気持ち
を強調するところもあって、とび飛ぶ成功感・喜びが浮遊りにされ、この
時の心が子どもの心にしみとれるようであった。このへんの手筋の妙味
をひとに名人芸である。筆録を何度も読み返してもあさないみりよくをむ
りている。

だが、不要な気持ちそのままではとべるわけがない。だから、
○小さくとへたもとはさんだわい
と ほりあげられる。
・とべなくとのがんばるんだ。

・思ひきりとんだ。

ひのひのの文をおさえられ、とべた理由を文脈に即して明確にされている。

次もやはり第二回と結んで第三回の説明をするのである。」と、すでに直感

的ひらめきによつてとられた第三回は、具体性にぎこち、繋ぎや豊かさが
充分でないと考えなければならぬ。それが六とくほよりて、具体性が与
えられ、生き生きとした真実感をもつた深みのある第三回の把握へと高め
られているのである。

最後の問い

○このひきじとふとおとへとべるだらうか。

この問い合わせに対する答えは本質「とべる」と答えていた。これは子ども
たち自身の体験を語っているわけである。時間のはじめに、

○この時のようにほくもなうたことがあると思った人、手を挙げなさい。
という声いで、この路を子どもたちの心に、ぐるり近づけられた笑いと呼応
しているようだ。

不幸—決意—成功感—自信、作者の心の動きを、文章に即して採われ、
四年生最初の教材としてのねらいが見事に達成されている。

七 よ む

この時間の振りによって、子どもたちは、この時の心をもつぶつと理会
し、高められた自分で伸び全文(板書)を読ませられた。「豆よむ」の読み
とはとても比較にならない。これが同じ子どもとの読み直かと思う複数段の
相連が感じられた。

この後、暗説指導をされたが、詩の内容をよく理解しているため、こと
も簡単に暗説しきりたり、これがもし機械的なだけ暗説させようとす

するものない、一時間たつばかりかるのではなかろうか、しかし、皆
誰でさにこしてか、口先生だけのものであるから、翌日はほんとむとの
距離に返ることだらう。師のまことに感銘深く教わったものは、いつまでも
心に残り、口すきむことになると思う。干しもたらは感謝できた飛びで、
みさびにじこやいた。終の寒風氣で囁まれた一時間であった。

師はじの「とびほこ」で、詩の扱いにおける一つのパターンを示して教
られると思う。即ち「二三とく」では、作者の想定とともに、詩の心を直譲
的に与えさせ、「六七とく」では、それを文脈で確認し詮断していくという
抜い方である。特に小学校教材の絵本、これに属しているところである
。教材を見分け、このパターンを自分のものにするには、私にとっては
まだかなりの年月がいるのではないかと思う。しかし、今まで全く苦手だ
った讀教材にも、自分なりに何があかるいものを感ずることができたのは、
ほんとうにありがたかったのである。